

対中国の問題、日本は譲れない線を明確に 渡辺博史氏

パクスなき世界 元財務官

パクスなき世界

2020年9月7日 20:00 [有料会員限定記事]

新型コロナウイルスによる危機をきっかけに世界は不連続の時代に入りました。あすはきのうの延長線上に
なく、古代ローマでパクスと呼ばれた平和と秩序の女神のいない世界が広がります。「パクスなき世界」の
あすを考えるための視座をどこに置くべきでしょうか。元財務官の渡辺博史氏に国際社会で影響力を一段と
強める中国との付き合い方について聞きました。

【関連記事】

経済覇権、150年ぶり交代 競うのは主義でなく賢さ
成長の女神 どこへ コロナで消えた「平和と秩序」

——今後、国際協調は機能するのでしょうか。

「それぞれの国が自国ファーストになってまとまりにくい。少なくとも日本と北米、西欧の連携は維持すべ
きだし、ある程度は維持されるとみている」

「対中国で言えば、2~3年前に比べて日米欧の認識の隔たりが小さくなった。経済面から中国を重視したド
イツや英国なども最近では中国に厳しい姿勢に変わった。英国が次世代通信規格『5G』の通信網から華為技術
(ファーウェイ) 排除を決めたのが象徴的だ」

「中国が経済発展を遂げれば自分たちと同じような国になるという十数年前の幻想は消えた。ユーラシア大
陸やアフリカも含めた世界の覇権を握ろうとし始めた中国に警戒感が広がる。米国は大統領選を控えるが、
どちらが勝っても中国への対応はあまり変わらないのではないか」

——対中国で日本はどう振る舞うべきですか。

「日本経済に占める対中貿易の比重はそれなりに大きい。少なくともモノの生産における中国の重要性は認
めないといけない。米国のように中国を全面的に敵に回せる立場にはない。ほかの多くのことは米欧と歩調
を合わせるべきだ。香港問題では早く中国を批判すべきだった。もっとも香港問題を理由に習近平(シー・
ジンピン) 国家主席の招請を取り下げるべきだという自民党内の意見は行きすぎだ。日本に呼んでおいて、
こちらできちんと苦言を呈するのが筋だろう」

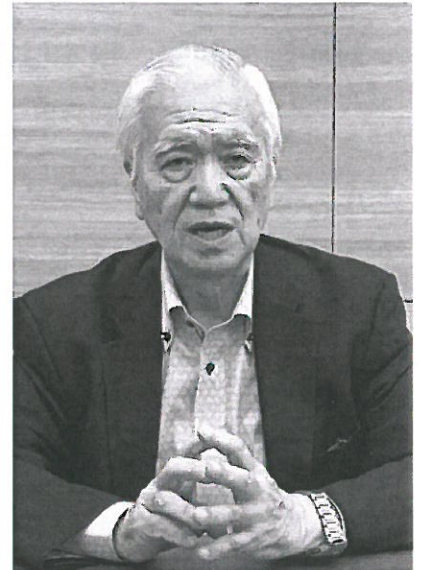
「中国問題に関して米欧から日本の考え方を問われる場面が増えるだろう。あらかじめ譲れない線を明確に
しておく必要がある。国内農業を気にする日本は貿易協議で態度を明確にするのに時間がかかり、世界貿易
機関(WTO) のドーハラウンドでは『G4』と呼ばれる米国や欧州連合(EU)、インド、ブラジルの枠組みに
入れなかった。貿易立国の日本に相当な痛手となった。中国問題で同じ轍(てつ)を踏まないようにした
い」

——日米欧以外の国々は米中対立にどう対応するのでしょうか。

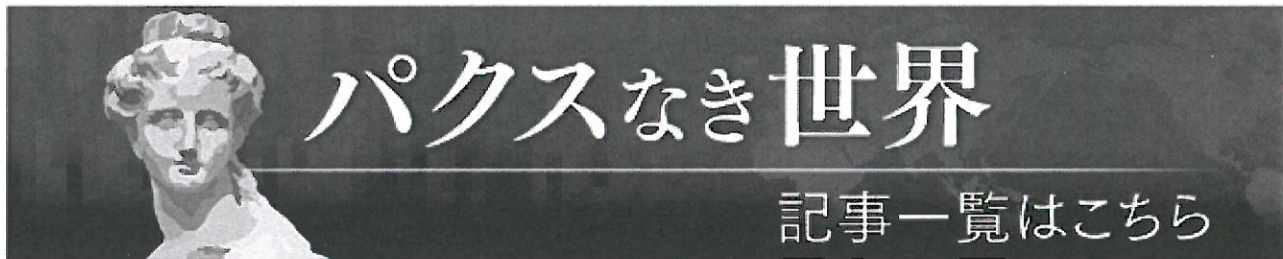
「内向きになっているインドや内政が混乱しているサウジアラビアなど中近東などは外の問題にあまり重きを置いていない。米中対立にどう関わるかよく考えているのは日欧と、ベトナムやフィリピン、インドネシアなどの東南アジアの国々だ」

「東南アジアは米国が中国からの輸入を減らした代わりに対米輸出を増やし、まさに漁夫の利を得ている。人口が若く、自前の市場は雇用を守るのに十分な規模ではない。漁夫の利を恒常化するにはどうしたらいいか、真剣に検討している」

(聞き手は江淵智弘)



わたなべ・ひろし 財務官や国際協力銀行(JBIC)総裁を経て2016年に国際通貨研究所理事長。海外人脈を生かした分析に定評。71歳



クリックすると「WE THINK」へ

